

「海ぶどう」のゲノム解説

安定生産に向け期待

O I S T

【那覇支社】沖縄科学技術大学院大学（OIST）マリンゲノミクスユニットの有本飛鳥研究員と將口栄一研究員、佐藤矩行教授らは2日までに、「海ぶどう」の全ゲノム解説に成功し

たと発表した。同ユニットによると、海ぶどうは10〜20%になる緑藻の一種だが、実は一つの細胞で出来ている不思議な生物。この巨大な単細胞海藻「海ぶどう」のゲノム解説に成功し

たのは世界初。

県特産の食用海藻として人気が高い海ぶどうの生産額は、陸上のビニールハウ

ス内の海水プールで養殖する方法が開発され結果、大量栽培が可能となり、2013年に10億円突破している。

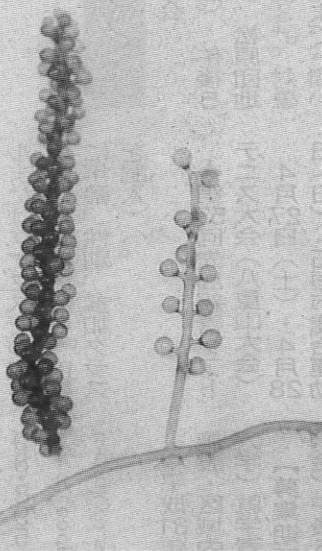
一方で、養殖の現場では、健康に育つ海ぶどうと食用部位である「粒」ができにくい海ぶどうの差が出ていた。同ユニットでは、解説されたゲノム情報を利用して、生育不良を起しにくい品種の選別が可能になったとしている。

有本研究員は「特殊な構造をもつ海ぶどうのメカニ

ズムの全体像を把握・制御したいと考え、その根幹のゲノム情報の解説に取り組んだ」と語る。今後については「育ちやすい『海ぶどう』を選別する方法が確立されたので、今後安定した生産につながるだろう」と期待した。

同ユニットグループリーダーの將口研究員は「研究で得られたゲノム情報は、海ぶどうを対象とした学術的、水産学的利用のみならず、海ぶどうに近い品種の藻が外来種として繁殖し環境破壊を引き起す事例への対策にも有益かもしれない」と、研究成果の意義を述べた。

研究は同ユニットと恩納村漁業協同組合との共同研究で実施。研究成果は、3月28日発行の英国科学雑誌DNA Researchに掲載された。



健康な海ぶどう（左）と生育不良の海ぶどう（OIST提供写真）